

A 27

肺癌剖検例より見たリンパ節生検の臨床病理
浜松医科大学病理 東京大学医学部病理 森田豊彦

目的：昨年の本学会で教室の最近17年間の肺癌剖検例の臨床病理学的解析を行い、生前の組織診ではリンパ節生検の占める割合が最多であることを指摘したが、その組織像、臨床経過、リンパ節所見と予後との関係などについて総合的解析を試みた。

材料及び方法：東大医学部病理学教室の1958年（昭和33年）から75年迄の18年間の409肺癌剖検例を使用した。うち生前にリンパ節生検が行われた症例は76例、18.6%である。剖検記録、組織標本、臨床病歴を調べて、東大病院病理部の病理組織検査記録及びリンパ節生検組織標本を検討した。生検部位は、上頸部7、鎖骨上窩57、腋窩7、ソ径部1例である。同時に気管支粘膜生検を受けた24例がリンパ節生検に次いで多いので両者の比較や特徴の差異を考察した。

結果：1. 組織診断 76例中癌陽性は73例で、腺癌（腺）41、扁平上皮癌（扁）10、未分化大細胞癌（未大）7、小細胞癌（未小）14、扁腺混合型1例で、生検診断で悪性が見落とし誤陽性はないが、細網肉腫、胸腺腫、腺様嚢胞癌とされた各1例、癌の組織型診断の妥当でないもの9、肺癌の多様性で剖検診断と異なるもの5、壊死のため癌としか言えぬもの1例であった。

2. 臨床経過 生検で癌陽性73例の平均臨床経過は11.5月、生検より平均4.3月で死亡している。組織型別では扁6.8、未大2.5、未小5.8、腺2.7月、鎖骨上窩の腺癌32例では生検確定より平均2.8月で死亡する。

生検後12ヶ月以上生存例は、29月の小細胞性未分化癌と42月の扁平上皮癌の各1例で、何れも放射線療法の著効例であった。

生検後1ヶ月以内の死亡例は、腺10、未大3、未小2、扁1例で、前2組織型に特に多いのが目立った。

3. リンパ節所見と予後 リンパ節が完全に癌で置換された腺癌9例は生検日より3.8月、リンパ節構造のよく残っている27例では3.4月で差異がなかった。

洞細網症は、(-)22, (+)22, (≡)2例で、(-)は生検日より2.4, (+)と(≡)は5.4月で死亡し著差がある。

傍皮質リンパ球増生は、(-)4, (+)44例で、(-)は生検日より1.6, (+)は4.4月で死亡し、有意義と考える。

胚中心の活動性は、(-)25, (+)13, (≡)2例で、(-)は生検日より2.9, (+)と(≡)は6.9月で死亡し著差がある。

癌の間質の小円形細胞浸潤は、(-)3, (+)51, (≡)11例で(-)は平均1ヶ月以内、(+)は4.6, (≡)は5.1月で死亡し、細胞浸潤の強さによる差異が認められなかった。

4. 気管支粘膜生検は、昭和38年度症例より見られ、最近3ケ年間はリンパ節生検とほぼ同数に増加して、肺門部に近い扁平上皮癌症例が約6割を占め、生検から死亡迄が平均5.9ヶ月で、リンパ節生検のそれよりも約1.6ヶ月程長い。

A 28

細胞形態からみた分化型腺癌

東京都老人総合研究所 病理

○木村雄二、蟹沢成好

東京都養育院付属病院 内科 水上陽真

横須賀共済病院 内科 三浦溥太郎

末梢型肺腺がんは、臨床的にも、組織学的にも多彩な像を呈する。分化型腺がんには固有の腫瘍基質を作り発育するものと、既存の肺胞壁を利用してそれを被覆するように発育するものとがあるが、細胞レベルの形態と発育様式との間に必ずしも一定の相関をみない。今回我々は人肺腺がん細胞を形態学的に検索し、細胞レベルでの分化度と発育形態、転移および臨床像との関連を検討した。

症例は65才から92才までの剖検例と切除例腺がん25例で、光顕ならびに電顕観察を行った。がん細胞の分化度判定には、正常肺構成細胞の小器官に類似の構造の有無を指標に用いた。

＜検索結果＞ 末梢型腺がんは次の二型に大別出来た。(1) Columnar cell type (Col型)、高円柱状細胞からなり、その細胞質の腺腔側は、Alcian blue (AB)、PAS 両者に薄く染まり、腺腔内にAB陽性物質を有し、一部には正常気管支粘膜からいきなりがん組織が乳頭状の発育を示すような腺がんの一群があり、時として電顕的に cilia、tonofilament 等が認められる。この腺がんは主として肺胞充実性に、一部は圧排性に発育するが、腫瘍辺縁部では肺胞被覆型発育を示すこともある。(2) Guboidal cell type (Gub型)、その細胞形態が立方形で、AB、PASに染まらず、細胞質内には高電子濃度顆粒を散見するほか、ほとんど、特徴的所見を見出し得ない腺がんがあり、その発育様式は主として肺胞を被覆する形をとる。

剖検例におけるCol型13例とGub型11例を検討したところ、所属リンパ節への転移はCol型で46%、Gub型で91%に認められたが、血行性転移はCol型23%、Gub型27%と差をみなかった。腫瘍内線維化及び間質細胞浸潤の著明なものはGub型に多く、胸膜陥入もCol型38%、Gub型64%にみられた。これらは両型腫瘍の組織破壊性の差を示すものと考えられる。因みに発見時臨床病期Stage IのものはCol型で78%、Gub型で55%であり、それらの発見時からの生存期間もそれぞれ 3.9 ± 2.0 年、 2.7 ± 0.9 年であった。

＜結論＞ 末梢型腺がんは上述の如くその細胞形態から二型に大別でき、従来分化型腺がんともみなされていたGuboidal cell typeよりも、Columnar cell type は分化度が高いと考えられ、その組織像、臨床像においても悪性度は低いと思われる成績を得た。